



原因・理由と話者の判断

第288回筑紫日本語研究会

北崎 勇帆 (高知大学)



1 はじめに

1.1 問題の所在

👤 現代日本語の従属節は内部要素の生起可能性に基づいて分類・整理が可能であり
(南1964, 1974, 1993, 田窪1987)

- (1) a. お菓子を食べ { \emptyset / させ / *ない / *た / *るだろう} ながら、論文を読む。
b. お菓子を食べ {る / させる / ない / た / *るだろう} ので、手を {洗う / 洗わない}。
c. お菓子を食べ {る / させる / ない / た / るだろう} が、ケーキは {食べる / 食べない}。

👤 近代語以前にも類似する階層性が認められる

- ❄ 中古…小田 (1990)、高山 (1992)、近藤 (1997) など
- ❄ 中世後期…原因・理由節について李 (1998, 2000, 2002, 2004)
- ❄ 近世…北崎 (2022b 予定)

1.1 問題の所在

👤 原因・理由節において、複数形式間の対立があることが知られる

❄️ 現代共通語のカラ・ノデについて永野（1952）

❄️ 中世後期のホドニ・ニヨッテについて小林（1973）、吉田永弘（2007a）

👤 吉田永弘（2007a）は以下のストーリーを想定

❄️ 已然形＋バ→ホドニ（客観的因由）

❄️ ホドニ（客観的因由＋主観的因由）

❄️ ニヨッテ（客観的因由） ホドニ（主観的因由）

1.1 問題の所在

👤 それらC類節の「推量を含む」機能は、歴史的に見れば後発的に獲得されたものであることが多いようである

❄️ カラ節は成立期には推量類を含まず（北崎2019）、上のホドニ節も同様

❄️ 種々の原因・理由節について山口（1996）が傾向を指摘する

1.2 発表の目的

👤 このことを踏まえながら、原因・理由節の機能変化について、以下の点を考えたい

❄️ 原因・理由節の機能の変化には傾向があるか？あるならば、なぜか？

❄️ 複数の原因・理由形式が存する場合の機能分担には傾向があるか？

👤 この議論は結果的に、以下の点まで踏み込むことになる

❄️ 話者のいわゆる「主観的判断」を根拠として提示する方法の問題

❄️ それを節への埋め込みとして行うかどうか

1.3 発表の構成

1. はじめに
2. 原因・理由節の機能変化
3. 原因・理由節の機能対立
4. 原因・理由の節への埋め込み
5. おわりに



2 原因・理由節の機能変化

2.1 原因・理由形式の概観

 以下の形式を概観

 拡張する

❄️ ホドニ

❄️ ニヨッテ

❄️ デ

❄️ サカイ

❄️ カラ

 拡張しない

❄️ 已然形+バ

❄️ ノデ

 分からない

❄️ ニ・ヲ

❄️ モノユエ

ホド二節

👤 中世前期に因果の用法が成立、中世後期に拡張

❄️ 李（2000）、吉田永弘（2000, 2007a）

❄️ マイが早く、肯否で対立するウに波及（北崎2022a）

(2) a. もんぞどもハ、よるもおそろしく候ほどに、かすがまちに候くらにあづけおきて候。
（典侍局讓状案・正応五 [1292] 鎌倉遺文17802・吉田2000：79）

b. スルニ、カタカラウホドニ云ワウニモ認（カタウ）ナウテハカナウマイゾ
（史記抄・弟子列伝 [1477] 3-132-14・北崎2022a）

❄️ アイダ・トコロデも同様だという（李1998, 2000）

ニヨッテ節

👤 中世前期に因果の用法が成立し（吉田永弘2007b）、近世に拡張（小林1973, 北崎2022a）

(3) a. 出家ノ功德ハ莫大ナルニ依テ、宿病立所口ニ癒ヘテ天命ヲ全クス。

（延慶本平家物語・第1末25オ・吉田2007b：203）

b. どふで銀で取らしてからが，銭買て持（もつ）であらふによつて，そちが勝手のよいやうに，亭主，銭三百取替へて遣つてたもれ

（傾城禁短気 [1711刊] 356-2・北崎2022a）

c. そしつたことをきいてみてじや有たじやあろよつて。めのさめぬうちおかえりなはれ。

（色深狹睡夢・52-洒落1826_01026,154400）

デ節

👤 近世前期に成立し、近代に拡張

❄️ そもそも江戸語・東京語ではノデが伸長する（原口1971, 吉井1977, 田中1993）ので現れにくいのだが、諸方言の事例（山田2002, 野間2017）を尊重

- (4) a. 「ヤレうろたへ者、どこへ行く」 「お暇が出た**で**去にまする
(心中二腹帯 [1722演] 湯澤1936 : 526)
- b. 坊主、咽喉（のど）が乾いたらう**で**、水のかわりに、好きなものを遣るぞ。
(泉鏡花・日本橋 [1914] 286-10)
- c. 『これを一杯飲んでゆくがいい。すぐ頭が軽くならう**で**』
(吉川英治・魚紋 [1936初出])
- d. 雨、降るやろう**で**、傘持ってけ。
(岐阜県美濃方言・山田2002 : 5)

サカイ節

👤 近世前期に成立し、近世後期に拡張（小林1977）

- (5) a. どふで。おもふやうにならぬ**さかい**。わたしやもふ。かまやせん程に。どふなとなんせとうそばらが立た**さかい**。ぐつといふたわいな。
(月花余情・52-洒落1757_01008,37830)
- b. 此嶋の。それ。あの。おさつさんとかいふお方に。逢ふて。わたしが。腹一ぱいいふてから。どふともしませう**さかい**。ちよつとよびにあげておくれ。
(北川蜆殻 [1826刊・大坂板洒落本])
- c. これから行くと、なんぼ急いでも帰りは夕方になるやろ**さかい**、昼飯はわしの留守に喰う事になる。
(清水紫琴 [1868生] 心の鬼 [1897初出])

カラ節

👤 中世後期に萌芽（湯澤1929：265）、近世前期に定着後、近世後期に
拡張（北崎2019, 2021）

- (6) a. 無用ナ事ヲ云**カラ**七国モ反シタソ （蒙求抄・巻9・湯澤1929：265）
b. 助六聞「女房がもらふ**から**。身におんはない」
（絵入狂言本・傾城二見の浦 [1689演] 上265上5・北崎2021：31）
c. そんならちつと [酒を] つぎんしよう**から**出しなんし
（甲駅新話・52-洒落1775_01010,60300）

已然形＋バ、ノデ節

👤 已然形＋バ、ノデは拡張しない

❄️ 已然バ：既定性を担う用言形態の制約を受ける

❄️ ノデ：準体助詞ノの名詞化の機能が推量の包含を阻害（三原1995）

👤 ただし「後世の違例」も存する（以下すべて小田2015：77）

- (7) a. これも前の世のことならめ**ば**、かかる筋にて (とりかへばや物語)
b. もみぢの色もゆゑふかく侍らめ**ば** (歌合229影供建・判)
c. 弟子などにも知られ給はざりけ**ば**こそ (撰集抄・巻3-1)

ノデ節

👤 ノデもしているのかもしれない (Twitter) (BCCWJでは0件)

(8) a. appleがおたかめ路線なのはいつもだろう**ので**、日経のみだしはずれてる気もする

(2008/10/26, <https://twitter.com/kzhr/status/960767920>)

b. これ、個人差、かなりあるだろう**ので**、希望者には抗体価を無料で調べることができるように行政的にしていただいたほうがよろしいんじゃないでしょうか？

(2021/8/24, <https://twitter.com/tsuyomiyakawa/status/1430009822758408198>)

❄️ このあたりの評価は悩みどころだが、ひとまず、ダロウカラが一般的であることは別のレベルで捉えておく

ニ、ヲ、モノユエ

👤 上代に既に例があり、分からない

(9) a. あこ一人を率て出でて、ここにとまりたまひて、静心なく通ひ歩かむに、知らぬ人なく
みな知りなむ。

(新全集訳：母上がここにとどまっていたら、そなたは母上のことを気づかって通って来る
でしょうから、誰もがみんな知ってしまうでしょう。) (うつほ物語・俊蔭・100-15)

b. 心細くてとまりたまはむを、かならず事にふれて数まへきこえたまへ。

(新全集訳：心細い状態でこの世に留まりになるだろうから、きっと何かにつけて人並にお目をおかけくださいまし。) (源氏・濤標・20-源氏1010_00014,109170)

c. 我が故に思ひな瘦せそ秋風の吹かむその月逢はむものゆゑ 〈安波牟母能由恵〉

(新全集訳：わたしのことで 思いわずらって瘦せないでおくれ 秋風が 吹くその月には
きっと逢えるだろうから) (万葉集・巻15-3586・10-万葉0759_00015,2400)

2.2 ここまでのまとめ

 原因・理由節は、

1. 成立時には推量類を含まず (→2.3)
2. 定着後に推量類を含む機能を獲得するのを基本的な傾向とし (→2.4)
3. 制約を受ける場合には拡張を起こさない

2.3 成立時に推量類を含まないこと

先行論の検討

❄ ホドニについて、「「已然形+ば」の表現領域をそのまま受け継いだ」（吉田永弘2007a：198）

❄ （射程からは外れるが）サカイ・カラなどが当初B類であったことは説明できない？

❄ 「已然形+ば」という形態の拘束を受けないことの指摘は重要

原因・理由形式がその素材の持つ制約を受けて、必然的にB類からスタートしやすいものとする

❄ 構造的な制約→2.3.1

❄ 意味的な制約→2.3.2

2.3.1 構造的制約

👤 構造的にB類出自にならざるを得ない？

❄️ 名詞句から節へ (cf. 京極1987, 竹内2007, 青木2014)

(10) a. [[…] カラ] …] → [[…] カラ […]]

b. [[[…] サカイ] ニ] …] → [[…] サカイニ […]]

👤 名詞句の段階では確定的な内容しか取れないと考える

❄️ 「関係節化あるいは連体修飾節化は結局のところ、主名詞（句）と一体になった観念を作り上げる過程である」（三原1995：302）

❄️ ガが当初ムを取らない（北崎2019、2021）のも同様の理由によるか

❄️ ただし、準体句も連体修飾節も古代～中世後期はムが一般的に生起できる

2.3.1 構造的制約

ホドニの問題

❄️ 竹内（2006）は因果のホドニの成立の前提に、「非スケール用法」（主節事態の背景や付帯状況）を想定

❄️ 「元来時間関係を表したホドニが生起する文は、因果連鎖パターン [注・因果関係が成り立つ事態の連鎖] が関与することで因果解釈を受けるようになった。」（竹内2006：65）

❄️ 「非スケール用法」のホドニにはムが生起するが、

❄️ さらばかく思しまどへる御心地も、すこししづませたまひなむ**ほどに** [≡ 静まる頃に]、
聞こえさせ承らん（源氏・夕霧・竹内2006：58）

❄️ 因果の初期の段階のホドニにはムが生起しない（吉田2007a, 北崎2021a）

 接続助詞化（脱範疇化）だけでは説明できない

2.3.2 意味的制約

👤 原因・理由形式は空間・時間的意味を出自としやすい（仁科2016）

❄️ 空間的意味…サカイ（二）・トコロデ・デ・カラ

❄️ 時間的意味…アイダ・ホドニ・トキニ（小川1991）

❄️ cf. Traugott and König（1991）の since の事例、Kuteva et al.（2009）

👤 含意として因果解釈が可能である（だけの）段階においては、確定的な事態のみを前項に取れるのではないか？

2.4 成立後に推量類を含むようになること

先行論の検討

- ❄ アイダ・ホドニ・ママ・カラを事例として、「はじめのうちは間接的・文脈依存的である表示性が、使われているうちに、より直接的・明示的なものになっていく」（山口1996：194）
- ❄ 「〔注：後件に命令や意志などを取るのは〕現実的な事態の原因理由表示の用法を基礎とする、その発展として可能になる」（山口1996：201）
- ❄ 「間接的・文脈依存的」である場合にそれが推量類を含めないこと、「直接的・明示的」である場合に推量類を含む／命令・意志などが主節に来るようになることの説明が不十分？

2.4 成立後に推量類を含むようになること

👤 原因・理由節への推量類の前接について、

❄ 「[発話時以降の事態を前件に、行為指示などを後件に取る表現は] 現実世界のできごとから離れた、話し手の思考内で捉えられた因果関係が基盤をなす表現である。この種の表現例が、「平家物語」の段階より格段に増加していることに、近世中期の原因理由表現の特徴が、典型的に現れていると考える。」（矢島2013：146）

❄ cf. 「判断の根拠」（田窪1987）

👤 「話し手の思考内で捉えられた因果関係」も含めて、二事態の関係付けを一文内で表示できる方が便利であるものと考え（→4）

❄ 「原理的に考えてみると、“確定”条件節という位置と、“推量”というモダリティとは相容れないはず」であり「むしろ現代語の振舞いこそが奇妙」（井島2011：131）と見る立場もあるが、実態はむしろ逆



3 原因・理由節の機能の対立

3.1 複数形式を持つ場合

👤 原因・理由に複数形式を持つ場合における形式の対立について

👤 どちらか片方が拡張する場合があります、

❄️ ホドニVSニヨッテは結果的にはどちらもC類になるが、共時的にはホドニ (C) ・ニヨッテ (B)

❄️ 「ホドニと同じように「ム+ニヨッテ」の承接も可能な形式であるが、「主観的因由」の領域に2つの形式は必要なかったため、ホドニとニヨッテで領域の棲み分けが行われたのだろう。」（吉田永弘2007a：202、注16）

👤 必然的に対立が生まれる場合がある

❄️ カラ・ノデの場合はノデの側が拡張し得ないので必然的にカラ (C) ・ノデ (B) という対立へ

3.2 諸方言のケース

諸方言の事例を参照する

❄ 「この〔注：盛岡方言の〕「アハンテ」と「ダス」は、どうやら、「から」と「ので」にほゞ当たるらしい。こういう区別は、盛岡方言以外にも、各地方言に見られるのではあるまいか。」（永野1952：40）

片方の統語的制約によって発達し得ない／しにくい場合

❄ （≡カラVSノデ）

(11) a. 明日は寒いだらう {デ/*モンデ}、コートを用意する。 （岐阜方言・小田2016：69）

b. カラ・ケニ・サカイニには推量形が接続でき、ガデ・モンデにはできない

（富山県方言・小西2016：192-194）

3.2 諸方言のケース

☺ 先に拡張した形式がもう片方の形式の発達を抑制すると思しき場合

❄ (≡ホドニVSニヨッテ)

(12) a. アメ フルゴッタ {×スケ／ガラ} カサモッテゲ。

(八戸市方言・日高2007)

b. アメ フルベ {ハンデ／×ドコデ} カサ モッテゲ。

(青森県東津軽方言・竹田2010)

❄ 「青森県の津軽方言では、ハンデとモンデ・トコロデとの対立がこれ [注：カラ・ノデの対立] に相当する」 (此島1966：218)

3.2 諸方言のケース

一方、単一形式の体系もある（小林1992）

(13) a. アメガ フルジャローケー カサー モッテイキンサイ。

（広島県三次市三和町・日高2007）

b. ソヤケ イマゴロ アノ チューガクカラ ハイリヨルヤローケ。

（各地方言収集緊急調査・北九州市・1907生男性・40_a_001-3,10320）

c. もう今はもう悪さをしろと言っても年よってすることができぬけれど、その時分にやずいぶん悪さをショツツローキニ（方言録音資料・高知県高知市朝倉・1894生女性）

C類節を複数持つ地域もあるので、抑制・対立はそれほど強い傾向ではないかも

※従属節内にモダリティ形式を含むか否かという点においても、デとサカイとで差はなかった。（野間2017：25）

(14) アメ フルダロー {デ／サキヤー} カサ モッテコ。

（京都府宮津市・野間2017）

※ 広島市でも「ケー」が共通語形「カラ」と親疎の対立を持つ（町2019）

3.3 ここまでのまとめ

ここまでのまとめ

- ❄️原因・理由節は必然的にB類を出自とし（2.1-2.3）
- ❄️特段の制約のない場合にはC類へと拡張し（2.1, 2.4）
- ❄️複数形式が存する場合には拡張し得る側が拡張する（ことが多い）（3）
 - ❄️先にある方が拡張するというわけでもなく、どちらがするのかはよく分からない
 - ❄️たまたま対立があるように見えるというだけなのかもしれない



4 原因・理由の節への埋め込み

4.1 埋め込みの可否

👤 判断の根拠を原因・理由節に埋め込むことを前提としてきたが…

👤 そもそも埋め込まないという選択肢もあり得るのでは？

❄️ 古代語のケース

❄️ ニ・ヲはムを包含可能ではあるが（近藤2012）、因果専用形式ではない（cf. 高山2014）

❄️ よって、已バVSニ を ノデVSカラ と同一視するのも勿論妥当ではない

❄️ 奈良田方言のケース

❄️ 鹿児島方言のケース

❄️ 「言えねえ～フッドデ、少なくとも現代は」（久保蘭愛氏 2021/3/28）

古代語のケース

 古代語は判断の根拠の専用形式を持たないと考える

(15) 左のおとど、「尚侍の御車寄せさせたまはむや。正頼、いぬ宮はものすべし。右大将の朝臣、思ふとも、身を二つにはえ分けじ」とのたまふ。

(新全集訳：左大臣殿が、「あなたは、尚侍の御車をお寄せになりますか。正頼は、いぬ宮のをいたしましょう。右大将の朝臣が自分でしようと思っても、体を二つに分けることはできないでしょうから」とおっしゃる。) (うつほ物語・楼上下・581-12)

奈良田方言のケース

以下の調査も判断の根拠の専用形式を持たない体系の存することを示唆する

※吉田雅子（2007）：山梨県奈良田方言（昭和4・女性）

1-7-2-1 雨が降るだろうから、傘を持っていけ。

※アメカ° フルヨ， コマルヨ， カサー モツテイカデイチャー ダメダヨ， モツテ イカデ。

※〈雨が降るよ， 困るよ， 傘を持っていかないのではだめだよ， 持って行きなさい。〉

※（{から} にあたるものは形式としては出なかった。）

1-7-2-2 山ではかなり雪が降っただろうから， 雪崩が心配だ。

※ヤマジャー カナリ ユキカ° フッテール [ドーデ] ヨ， ナダレニ キオ ツケデヨー。

※〈山じゃかなり雪が降っているからよ，雪崩に気を付けなさいよ。〉

※（推量表現の回答が得られなかった。）

奈良田方言のケース

👤 1-7-2-3 たいした雨にはならないだろうから、傘は持っていかない。

❄️ タイシタ コター ナイラ[ニ] アメワ, カサモ アレワ モッテイカデモ.

❄️ 〈たいしたことはないだろうに雨は、傘もあれは持っていかないでも.〉

👤 1-7-2-4 外は寒いだろうから、厚着をして出かけよう。

❄️ ソトモ アリャ ウント サブイヨ, アトゥキ° オ シテ イカデチャ, カゼオ ヒク[デ].

❄️ 〈外もあれはうんと寒いよ, 厚着をして行こう, 風邪を引くので.〉

❄️ ({だろうから} にあたるものは形式としては出なかった.

カゼオ ヒク[デ]が「風邪を引くので」の意で、原因・理由に相当する。)

👤 1-7-2-5 この分だと明日も雨だろうから、遠足は中止になるだろう。

❄️ ナンダカ サッパリセノーカ° , アシタモ アメドゥラヨー, イェンソカー イマニ ヤメニ ナルヨ.

❄️ 〈何だかさっぱりしないが、明日も雨だろうよ, 遠足は今に止めになるよ.〉

❄️ ({から} にあたるものは形式としては出なかった.)

4.2 行為指示の根拠提示を例に

👤 以下のことを手がかりに、行為指示における根拠の提示の方法を中古和文と虎明本とで比較（パイロット的調査）

- ❄️ 非現実事態の根拠 + 行為指示が「話し手の思考内で捉えられた因果関係」であること
- ❄️ 依頼談話において「事情説明」が行われやすいこと（熊谷1998）
 - ❄️ すみませんけど（恐縮表明）
 - ❄️ ちょっと寒いもんで（理由の説明）
 - ❄️ 窓を閉めてもらえますか（依頼の表出）

ケーススタディ

以下の場合に絞る

❄ 行為指示と同一の発話内で、命令形のフォーカス外に節を持つ発話

❄ 文認定の問題を避けるためにこのように処理する

❄ その行為指示の根拠が明示される場合に、どこに現れるか？

有り得る出現位置

1. 条件節に埋め込む
2. 条件節に埋め込まず、前文に示す
3. 条件節に埋め込まず、後文に示す

中古和文の場合

👤 中古和文の場合…後続文での提示が多い

(16) a. 平中→女 「さらばいかがはせむ。とく返りたまへ。遅くはえしも対面せじ」
とて、

(新全集訳：では、しかたございません。早くお引き返し下さい。遅くなるのであれば、もうお目にかかれないでしょう) (平中物語・20-平中0960_00001,216660)

b. 「今日よき日なり。円座かいたまへ。居そめむ」などばかり語らひて、

(新全集訳：今日は吉日です。円座をお貸しく下さい。座り初めをいたしたいものです)

(蜻蛉日記・下・20-蜻蛉0974_00011,42480)

中古和文の場合

c. 源氏→小君 「…さりとも、あこはわが子にてをあれよ。この頼もし人は行く先短かりなむ」

(新全集訳：それにしても、そなたはわたしの子でいておくれ。あの頼りの人だって、どうせあといくらかも生きてはいないのだから) (源氏・帚木・20-源氏1010_00002,203070)

d. 源氏→命婦 「…いとおぼつかなう心得ぬ心地するを、かの御ゆるしなうともたばかれかし。心いられし、うたてあるもてなしにはよもあらじ」など語らひたまふ。

(新全集訳：まったくいやな合点のゆかない気持なのだから、たとえ姫君のお許しがなくとも、一工夫しておくれ。こちらがやきもきして、けしからぬふるまいは決してしないから) (源氏・末摘花・20-源氏1010_00006,45710)

虎明本の場合

👤 虎明本の場合…従属節での提示が多い

- (17) a. 「今から何もかはふ程におまきやれ (虎明本・鴈盗人・40-虎明1642_02003,4380)
b. 「いや／＼いなせたらば、たのふだ人のおしかりやらふ程に、おとおりやれ
(虎明本・察化・40-虎明1642_04036,13970)
- (18) a. 「内々申上うとぞんずる所で御ざつたに、かたじけなふ御ざる、いたしまらせう、
おしへてくだされひ (虎明本・伊呂波・40-虎明1642_07028,1350)
cf. 「尤じや、其よし申さう、さらばとりませう程に、あいてを下されひと申
(虎明本・鼻取相撲・40-虎明1642_02006,42730)
b. 「扱はつうゑんにてましますか、最後の有様かたり給へ、跡をばとふて参らせん
「さあらば其時の有さまかたり申さん、跡をとふて給候へ
(虎明本・通円・40-虎明1642_06022,8530)

虎明本の場合

👤 推量ではないが、こんな例もある

(19) a. 「いや / \ まいらぬ 大名「くるしうなひ、こひ

(虎明本・鬪罪人・40-虎明1642_04012,10930)

b. 「いや / \ さやうにたくさんにはおわづらひで御ざる「くるし
うなひ**程**にくへ

(虎明本・饅頭・40-虎明1642_02030,7830)

文の埋め込み

👤 中古の「判断文＋根拠文」が制約下で「埋め込まない」と見るとき、

👤 以下のような「文相当句＋ナレバ」は根拠の埋め込みの初期の様相？

(20) a. この盃をば先少将にとらせたけれども、親より先にはよものみ給はじなれば、重盛
まづ取あげて少将にさゝむ。

(新全集訳：この盃を、まず少将にとらせたいけれども、親よりも先には、まさかお飲みになるまいから、重盛がまず取り上げてから少将にさそう) (覚一本平家物語・無文・矢毛1999：32)

b. 季春が頸を切りて、はやくぞ国司の心はしづまり給はむなれば、われは知らず顔にて、季春が一向とがになして、切りて、身を安くし給ふべし

(新全集訳：この季春の首を切れば、すぐにも国司の怒りはお鎮まりになるでしょう。基衡さまは何も知らない顔をされて、すべて季春の罪ということにして、私めをお斬り下さい。)

(十訓抄・第10-74・30-十訓1252_10074,4250)



5 おわりに

発表のまとめ

👤 原因・理由節は以下の拡張の傾向を持ち、

1. 成立時には推量類を含まず、
2. 定着後に推量類を含む機能を獲得するのを基本的な傾向とし、
3. 何らかの制約を受ける場合には拡張を起こさない

❄️ B類・C類の対立は、拡張し得る形式が拡張を起こした結果の産物である

👤 こうした傾向がある理由は、素材の形式の構造的・意味的制約により説明される

👤 古代語の場合、判断の根拠を節に埋め込まずに提示する

発表のまとめ

👤 埋め込みの可否という観点からは、以下のように整理される

- ❄️ a. 従属節への埋め込みという手段を取らない
 - …古代語（、奈良田方言、鹿児島方言？）
- ❄️ b. 従属節への埋め込みという手段を取る
 - ❄️ b-1. 文相当句を埋め込む…中世前期
 - ❄️ b-2. 用言句を埋め込む
 - (b-2-1. B類とC類を使い分ける
 - …中世後期以降の中央語・上方語、近畿地方以東全般
 - b-2-2. C類のみを持つ…中国地方以西全般)



使用資料

👤 国立国語研究所（2021）『日本語歴史コーパス』バージョン2021.3

👤 うつほ物語：『新編日本古典文学全集』小学館

👤 北川蜷殻：『洒落本大成』中央公論社

👤 日本橋・魚紋・心の鬼：『全文検索システム『ひまわり』版『青空文庫』パッケージ（20211001）』（<https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?aozora>）

❄️ 『日本橋』の引用は国会図書館所蔵本のデジタルデータによる。

❄️ <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/909724>

👤 国立国語研究所（編）『日本語諸方言コーパス（COJADS）』バージョン2021.1

👤 方言録音資料：国立国語研究所『方言録音資料資料シリーズ』

参考文献

- 👤 Kuteva, Tania, Bernd Heine, Bo Hong, Haiping Long, Heiko Narrog, Seongha Rhee. 2019. (Eds.) *World Lexicon of Grammaticalization. 2nd Edition*. London: Cambridge University Press.
- 👤 Traugott, Elizabeth Closs and Ekkehard König. 1991. The Semantics-Pragmatics of Grammaticalization Revisited. In Elizabeth Closs Traugott and Bernd Heine (Eds.) *Approaches to Grammaticalization: Volume I. Theoretical and methodological issues*. Amsterdam: John Benjamins, pp.189-218.
- 👤 青木博史 (2014) 「接続助詞「のに」の成立をめぐって」青木博史・小柳智一・高山善行 (編) 『日本語文法史研究2』ひつじ書房, pp.81-105.
- 👤 李淑姫 (1998) 「大蔵虎明本狂言集の原因・理由を表す接続形式について—その体系化のために—」『筑波日本語研究』3, pp.43-59.
- 👤 李淑姫 (2000) 「キリシタン資料における原因・理由を表す接続形式—ホドニ・ニヨッテ・トコロデを中心に—」『筑波日本語研究』5, pp.92-104.
- 👤 李淑姫 (2002) 「『応永二十七年本論語抄』の因由形式の階層『筑波日本語研究』7, pp.63-81.
- 👤 李淑姫 (2004) 「中世日本語の原因・理由を表す接続形式の階層構造—抄物資料を中心に—」『日本學報』58, pp.193-208.
- 👤 小川栄一 (1991) 「延慶本平家物語に見える原因・理由の接続助詞句トキニ」『福井大学教育学部紀要 第I部 人文科学 国語学・国文学・中国語学編』39, pp.1-13.
- 👤 小田佐智子 (2016) 「岐阜方言の原因・理由に表れるモンデ」『阪大社会言語学研究ノート』14, pp.67-75.
- 👤 小田勝 (1990) 「中古和文における接続句の構造」『国学院雑誌』91(8), pp.38-47.
- 👤 小田勝 (2010) 「相互承接からみた中古語の時の助動詞」月本雅幸・藤井俊博・肥爪周二 (編) 『古典語研究の焦点』武蔵野書院, pp.962-949.
- 👤 小田勝 (2015) 『実例詳解古典文法総覧』和泉書院.
- 👤 北崎勇帆 (2019) 「意志・推量形式の終止・非終止用法の推移」『高知大国文』50, pp.1-17.
- 👤 北崎勇帆 (2021) 「中世・近世における従属節末の意志形式の生起」『日本語の研究』17(2), pp.19-36.
- 👤 北崎勇帆 (2022a) 「意志・推量形式の従属節への取り込み」『中部日本・日本語学論集』和泉書院.
- 👤 北崎勇帆 (2022b) 「近世における従属節の階層性」岡部嘉幸・橋本行洋・小木曾智信 (編) 『コーパスによる日本語史研究—近世編—』ひつじ書房.
- 👤 熊谷智子 (1998) 「依頼の言語行動におけるストラテジーの展開構造」『国立国語研究所創立50周年記念 研究発表会資料集—歩こう日本語の世界を—』pp.111-116.

参考文献

- 小西いずみ (2007) 「富山方言の原因・理由表現」方言文法研究会 (編) 『全国方言文法辞典《原因・理由表現編》』
<http://hougen.sakura.ne.jp/shuppan/2007.html>
- 小西いずみ (2016) 『富山県方言の文法』ひつじ書房.
- 此島正年 (1966) 『国語助詞の研究—助詞史の素描—』桜楓社.
- 小林賢次 (1992) 「原因・理由を表す接続助詞—分布と史的変遷—」『日本語学』11(6), pp.131–141.
- 小林千草 (1973) 「中世口語における原因・理由を表わす条件句」『国語学』94, pp.16–44.
- 小林千草 (1977) 「近世上方語におけるサカイとその周辺」近代語学会 (編) 『近代語研究第5集』武蔵野書院, pp.309–353.
- 近藤泰弘 (2012) 「平安時代語の接続助詞「て」の様相」『国語と国文学』89(2), pp.49–60.
- 高山善行 (1992) 「中古語モダリティの階層構造—助動詞の意味組織をめざして—」『語文』58, pp.35–45.
- 高山善行 (2014) 「条件表現とモダリティ表現の接点—「む」の仮定用法をめぐる—」益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦 (編) 『日本語複文構文の研究』ひつじ書房, pp.279–297.
- 高山善行 (2016) 「準体句とモダリティの関係をめぐって」福田嘉一郎・建石始 (編) 『名詞類の文法』くろしお出版, pp.105–119.
- 竹内史郎 (2006) 「ホドニの意味拡張をめぐって—時間関係から因果関係へ—」『日本語文法』6(1), pp.56–71.
- 竹内史郎 (2007) 「節の構造変化による接続助詞の形成」青木博史 (編) 『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房, pp.159–179.
- 竹田晃子 (2010) 「青森県東津軽方言の原因・理由表現」方言文法研究会 (編) 『全国方言文法辞典資料集 (1) 原因・理由表現』
- 田中章夫 (1993) 「因果関係を示す接続の「デ」「ノデ」の位相」近代語学会 (編) 『近代語研究第9集』武蔵野書院, pp.257–279.
- 永野賢 (1952) 「から」と「ので」とはどう違うか」『国語と国文学』29(2), pp.30–41.
- 仁科明 (2016) 「助詞の史的変遷」中山緑朗・飯田晴巳 (編) 『品詞別学校文法講座5 助詞』明治書院, pp.271–297.
- 野間純平 (2017) 「宮津市方言の原因・理由表現デ・サカイ—談話データにもとづく使い分けの実態—」『阪大社会言語学研究ノート』15, pp.22–35.
- 原口裕 (1971) 「「ノデ」の定着」『静岡女子大学研究紀要』4, pp.31–43.
- 日高水穂 (2007a) 「青森県八戸市方言 (若年層) の原因・理由表現」方言文法研究会 (編) 『全国方言文法辞典《原因・理由表現編》』
- 日高水穂 (2007b) 「広島県三次市三和町方言の原因・理由表現」方言文法研究会 (編) 『全国方言文法辞典《原因・理由表現編》』

参考文献

- 藤原浩史 (2014) 「平安・鎌倉時代の依頼・禁止に見られる配慮表現」野田尚史・高山善行・小林隆 (編) 『日本語の配慮表現の多様性』くろしお出版, pp.75-92.
 - 船木礼子 (2007) 「京都市方言の原因・理由表現」方言文法研究会 (編) 『全国方言文法辞典《原因・理由表現編》』
 - 町博光 (2019) 「広島市方言の接続助詞「ケー／ケン」と「カラ」」『国語国文論集』49.
 - 南不二男 (1964) 「複文」森岡健二・永野賢・宮地裕・市川孝 (編) 『講座現代語6口語文法の問題点』明治書院, pp.71-89.
 - 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店.
 - 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店.
 - 三原健一 (1995) 「概言のムード表現と連体修飾節」仁田義雄 (編) 『複文の研究 (下)』くろしお出版, pp.285-307.
 - 矢毛達之 (1999) 「中世前期における「文相当句+ナレバ・ナレド (モ)」形式」『語文研究』88, pp.32-44.
 - 矢島正浩 (2003) 「近世中期上方語における原因・理由表現」『国語と国文学』80(7), pp.55-70.
 - 矢島正浩 (2012) 「条件表現史上における原因理由文の変化の意味」『国語国文学報』70, pp.36-11.
 - 矢島正浩 (2013) 『上方・大阪語における条件表現の史的展開』笠間書院.
 - 山口堯二 (1996) 「原因理由表現の推移傾向」『日本語接続法史論』和泉書院, pp.194-211.
 - 山田敏弘 (2002) 「美濃方言の原因・理由表現」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』51(1), pp.1-21.
 - 湯澤幸吉郎 (1929) 『室町時代言語の研究』大岡山書店.
 - 湯澤幸吉郎 (1936) 『徳川時代言語の研究 上方編』刀江書院.
 - 吉田永弘 (2000) 「ホドニ小史一原因理由を表す用法の成立一」『国語学』51(3), pp.16-29.
 - 吉田永弘 (2007a) 「中世日本語の因果性接続助詞の消長一ニヨッテの接続助詞化を中心に一」青木博史 (編) 『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房, pp.181-203.
 - 吉田永弘 (2007b) 「接続助詞ニヨッテの源流」『国学院雑誌』108(11), pp.195-206.
 - 吉田雅子 (2007) 「山梨県奈良田方言の原因・理由表現」方言文法研究会 (編) 『全国方言文法辞典《原因・理由表現編》』
- 本研究は JSPS 科研費 20K13049 「意志・推量形式を中心とした日本語文構造の変化の研究」の成果の一部です。